



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2025年度北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書
Author(s)	加藤, 博文
Issue Date	2026-06-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99906
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	report
File Information	2025Hamanaka.pdf



2025年度 北海道礼文町 浜中2遺跡 発掘概要報告書



Designed by YUKI koji

北海道大学アイヌ・先住民研究センター
Center for Ainu and Indigenous Studies,
Hokkaido University

例 言

1. 本概報は、2025 年 8 月 1 日から 8 月 30 日にかけて日本学術振興会科学研究費補助金 学術変革領域研究 (A)「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」の計画研究の一つである「北海道の先史人類及び文化の形成」の研究活動の一環として、及び北海道大学 Summer Institute プログラムとして行った北海道礼文郡礼文町に所在する浜中 2 遺跡での考古学発掘調査の概要報告である。

2. 本調査は、北海道大学が組織主体となり、以下の体制で実施した。調査組織は以下のとおりである。

発掘主体者	山崎幸治（北海道大学アイヌ・先住民研究センター・センター長）
発掘担当者	加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授）
調査員	平澤 悠（東亜大学人間科学部）
調査員	鈴木建治（国立アイヌ民族博物館・研究主幹）
調査員	陳 瑪玲（国立台湾大学人類学系・教授）
調査員	呉 牧鎔（国立台湾大学人類学系・副教授）
調査員	鄭 玠甫（国立台湾大学人類学系・助理教授）
調査員	HOMMEL Peter（University of Liverpool・Senior Lecturer）
調査補助員	GOMES, Amanda（北海道大学学術研究員）
調査補助員	劉 秉玟（北海道大学学術研究員）
調査補助員	JORDAN, Ballad（北海道大学大学院文学院博士課程）
調査補助員	ULANOV, Alexsander（北海道大学大学院文学院博士課程）
調査補助員	KOSHKINA Daria（北海道大学大学院文学院博士課程）
調査アドバイザー	内山幸子（東海大学国際文化学部・教授）
	長田直樹（北海道大学情報科学研究院・准教授）
	上奈穂美（国立歴史・民俗学博物館・科研費支援研究員）
	木山克彦（東北学院大学文学部・准教授）
	佐藤孝雄（慶應義塾大学文学部・教授）
	寺田洋平（総合研究大学院大学統合進化科学研究センター・准教授）
	中村英人（福井県立大学恐竜学部・講師）
	山崎敦子（名古屋大学大学院環境科学研究科・講師）
	渡辺 剛（総合地球科学研究所・准教授／北海道大学大学院理学院・講師）
	白石溪冴（長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室）

遺 跡 名	浜中 2 遺跡（北海道教育委員会登録番号：H-08-019）
所 在 地	北海道礼文郡礼文町大字船泊村字ホロナイホ 499-2, 499-4, 499-5
発 掘 面 積	40 m ²

3. 2019 年度の調査実施にあたっては、日本学術振興会科学研究費補助金 学術変革領域研究 (A)「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」の計画研究の一つである「北海道の先史人類及び文化の形成」(JSPS23H04841) 及び「日本列島域における先史人類史の復元的方法の研究」(JSPS23H04836)、の利用した。

4. 本概報の作成は、本研究プロジェクトに参加したメンバーが分担しておこなった。出土遺物のうち、土器片の拓本・断面実測およびトレースは、赤川沙希（北海道大学アイヌ・先住民研究センター技術補助員）・劉秉玖（北海道大学学術研究員）が担当した。石器の写真撮影は ULANOV Alessander（北海道大学大学院文学院博士課程）が担当した。
5. 2025 年度の出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターで保管している。
6. 調査の実施に際しては、調査地点地主である末吉愛衣氏に調査期間の全体を通じてご理解とご協力を得た。また調査期間中に開催した「考古学とアート・ワークショップ」においては、チェコ人形アカデミーの人形作家である沢則之（北海道大学・客員教授）の指導を受けた。
調査までの準備と調査実施においては、小野徹町長、竹中俊一教育長、藤澤隆史教育委員会次長、高橋鵬成学芸員をはじめ礼文町および礼文町教育委員会にご助力・ご支援をいただいた。礼文町浜中自治会長の相原隆行氏には、浜中自治会館を使用させていただいた。また北海道アイヌ協会には調査の実施に際してご助言・ご支援いただいている。調査メンバーを代表して感謝の意を表する。
7. 本年度の出土遺物のうち、イヌの遺体については、東海大学国際文化学部の内山幸子教授を中心に整理作業をおこなっている。またカラフトブタについては、国立歴史民俗学博物館の上奈緒美研究員及び総合大学院大学統合進化科学研究センターの寺井洋一准教授及び博士課程の糸井梨香子氏が分析を進めている。土壌の有機質分析については、福井県立大学恐竜学部の中村英人准教授及び Zarina Bikmullina（北海道大学大学院環境科学院博士課程）を中心に分析を進めている。
8. 2024 年度フィールドスクール参加者
大学院生：
McKnight Connor（ハーバード大学）、Gan Xinyu（西北大学）、Zhong Qing Lang（香港恒生大学）、Miklos Sebastian（哲人コンスタンティノス大学）、Enggist Sabarina（ヌーシャテル大学）、Beresford Williams Georgia（オーストラリア国立大学）、Bounmainithstarelh Arnaud、Aghina Charlotte（ソルボンヌ大学）、七座有香（サイモン・フレーザー大学）、折井美陽、艾凱玲、佐々木雄翔（慶應義塾大学）、平澤さつき、Zarina Bikmullina（以上、北海道大学）

学部生：
Chen Piaoyi（蘇州外国語学校）、Bai Hinzhu（浙江大学）、Zhu Qiuhaio、Zhu Yuxuan（以上、香港中文大学）、Yang Soying（山東大学）、Li Xinyi（広東外語外資大学）、Ang Qianbo Joseph（シンガポール国立大学）、Osello Nihon（ヌーシャテル大学）、Okuda Yumi（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）、Lieurade, Jeanne（ケンブリッジ大学）、Dagulas Jake、Jeremy Catherine、Hesken Ellena（リバプール大学）、Raghu Dayan Krishnan、Hill Charles（以上、オックスフォード大学）、Bruggeman Zoe、Zoomer Denis（以上、サクソン応用科学大学）、Chang Mu-Ying、Wu Chun-Kuei、Chung Po-Chu、Wu Yi-Jen、Tseng Shiau-Ching、Chen Sih-Chiao（以上、国立台湾大学）、松村和歩（金沢大学）、阿部太智、小沼雄大（以上、慶應義塾大学）、宮尾碧（国学院大学）、古宇田若季、藤原眺希、福嶋泰成、大塚芭南、松本美羽、吉田彩花、伊達葵彩、長明日楓、石田寛和、奈良俊成、神山大喜（北海道大学）

社会人：
Lane M. Atmore、Jack Atmore（ブリティッシュ・コロンビア大学）

目 次

第1章 調査の目的と実施体制	1
第1節 調査の目的	
第2節 浜中2遺跡における考古学調査とプロジェクト研究との関連	
第2章 浜中2遺跡の調査と概要	2
第1節 調査にいたる経緯	
第2節 礼文島の環境	
第3節 遺跡の立地	
第3章 調査区について	5
第1節 調査区の設定	
第2節 調査区の層序	
第4章 検出された遺構	8
第1節 アイヌ文化期の遺構	
第2節 十和田文化期（オホーツク文化前期）の遺構	
第5章 主な出土遺物	10
第1節 出土遺物の構成	
第2節 土器	
第3節 石器	
第4節 骨角器	
第6章 まとめ	20
引用・参考文献	21

第1章 調査の目的と実施体制

第1節 調査の目的

浜中2遺跡での考古学調査は、2011年から2016年までカナダ社会科学・人文科学研究評議会（SSHRC）の研究助成を受けたバイカル・北海道考古学プロジェクト（BHAP：Baikal-Hokkaido Archaeology Project）の一環として、アルバータ大学（カナダ）と北海道大学が共同で企画実施してきた。カナダの研究助成が終了した2017年度からは、北海道大学が主催する国際フィールドスクールとして、また日本学術振興会の研究拠点形成事業（先端拠点形成型：2013-2018 及び 2019-2023）及び科学研究費補助金（基盤研究A：2021-2025）の一環として実施してきた。2023年度からは科学研究費補助金 学術変革領域研究（A）の一環として継続してきている。

調査の目的は、船泊湾の砂丘上に位置する遺跡形成過程の解明、すなわち縄文文化期後半から18世紀の近世段階の歴史段階のアイヌ文化に至る生活空間としての場の利用の変遷と、過去の気候環境変動と居住集団の経済活動および遺跡環境の変化との対比をおこない、遺跡に居住した人類集団の長期的な環境適応行動と、その中で民族文化の形成過程の復元を目指すことにある。2025年度の調査は、4mの層厚で累積する文化層の中でも、以下の文化層と遺構に調査目的を定めて計画を立てた。

- 1）調査区南西端でI層中において確認された近世アイヌ文化期のアワビ貝集積遺構の広がり把握、
- 2）III層からV層にかけてのオホーツク文化期の遺物集中区及び遺構の確認、
- 3）IX層中で確認された縄文文化晩期の土器・石器・動物骨で構成される遺物集中区の面的広がり確認。

第2節 浜中2遺跡における考古学調査とプロジェクトとの関連

礼文島は、先史狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動の復元にとって最良のデータが得られる場所として、早くから知られており、北海道大学、筑波大学、国立歴史民俗博物館、千葉大学などの研究チームによる組織的な調査が実施されてきた。本プロジェクトでは、礼文島北部の船泊湾に立地する遺跡環境に注目し、湾内の砂丘上に所在する遺跡群において、1）居住地点における生業活動の時期的変遷の把握、2）砂丘形成過程と生業活動面（生活面）の形成過程の相関関係の解明、3）古人骨からの集団系統や古食性データに関するサンプルの収集、4）遺跡周辺における古気候・古環境データの収集を目指している。

調査は、2023年度から採択された文部科学省 科学研究費助成事業 学術変革領域研究「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」の計画研究B02班「北海道における先史人類及び文化の形成（2023年度から2027年度）（JSPS23H04841）」の一環として実施しているほか、プロジェクト全体のフィールドスクールとして位置付け、国内外の若手研究者が幅広い調査研究手法を学ぶとともに、研究資料を確保する機会を提供している。

第2章 浜中2遺跡の調査概要

第1節 調査にいたる経緯

北海道大学とアルバータ大学による浜中2遺跡における国際共同調査は、2011年から2016年まで実施された（Weber, Jordan, and Kato 2013）。調査にいたる経緯は、これまでの概要報告において説明してきた通りである（加藤・岩波・平澤・鈴木 2012）。

2012年度に調査では、主に地中探査レーダーによる表層からの貝層や墓、配石遺構の分布状態を確認する調査を実施した。2013年度の調査は、7月23日から8月20日までの期間で発掘調査を実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2014）。2014年度の調査は、8月1日から8月31日までの期間で発掘調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2015）。2015年度の調査では、それまでのオホーツク文化期と続縄文文化期に加えて、下層で確認された縄文文化期の遺物包含層の調査を目的として、8月1日から8月31日までの期間で調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2016）。2016年度の調査は、調査区のこれまでの調査区の南側においてオホーツク文化期の包含層の広がりを確認する調査を、また従来の調査区では引き続き続縄文文化期および縄文文化期の遺物包含層の調査を主たる目的として8月1日から8月21日までの期間で調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2017）。

2017年度からは、北海道大学アイヌ・先住民研究センターが中心となり、引き続き最下層の文化層の確認と、調査区南側での上層の文化層の広がりを確認することを目的として、8月1日から8月25日までの期間で実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2018）。2018年度の調査は、調査区南側の確認された近世段階のアイヌ文化期のアワビ貝集積遺構の調査と、IX層の縄文文化晩期の土器・石器・動物骨の面的広がりを確認を目的として8月4日から8月25日の期間で実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2019）。またこれまでの調査成果については、学会報告など口頭による報告も行なっている（岩波・長沼 2015、加藤 2015、岩波ほか 2016 他）。

2020年度から2022年度にかけては、新型コロナウイルス蔓延の影響を受けて、野外調査の実施を見送っている。2023年度から再開された発掘調査では、遺跡最下層の文化層の確認と、調査区南側における上層の文化層の広がりを確認する調査を実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2024）。

第2節 礼文島の環境

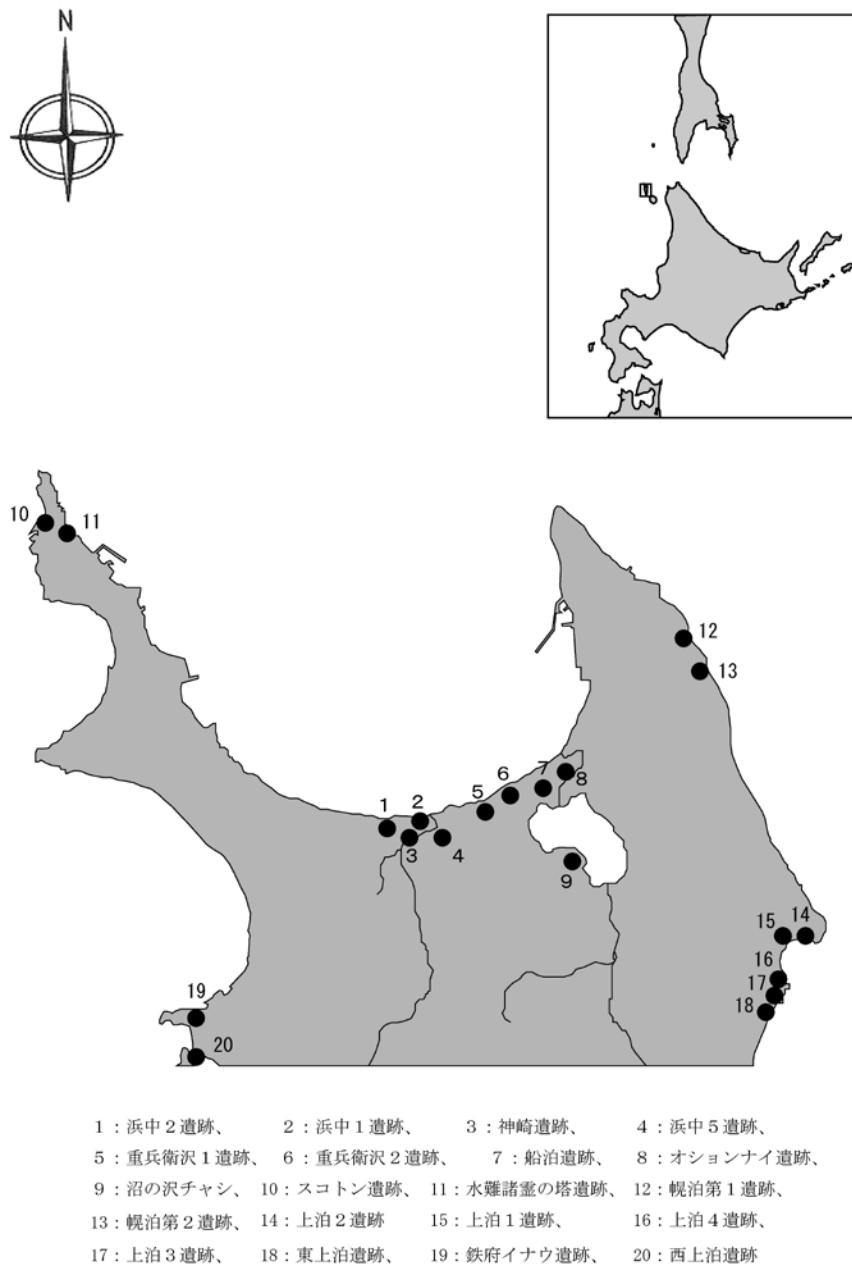
礼文島は、北海道島の北西約60kmに位置する離島である。島は南北に約25.8km、東西に7.9kmと南北に細長い形状を呈している。島の東西の両海岸は、海蝕崖によって急峻な海岸線が続き、島中央部より注ぎ出る河川により開析された谷状地形と河口が入江状の地形を作り出している。島の北部は、一転して緩やかな起伏が続き、金田岬とスコトン岬に挟まれた船泊湾は、遠浅の大きな内湾地形を作り出しており、湾の中央部には複数の時期により形成された砂丘地形が広がっている。島の最高地点は礼文岳で、海拔490mを測る。島全体は、低標高の緩やかな起伏に覆われている。

島の動植物は、離島特有の特色を示しており、ヒグマ、エゾシカ、キツネなどの大型中型獣は生息していない。植生としては、針葉樹としてトドマツ、ハイマツ、落葉広葉樹はダケカンバ、オノエヤナギ、草本類ではチシマ

ザサが主体をなしている。

島の北端の船泊湾には、海岸に平行して伸びる砂丘列が発達しており、東側には久種湖が位置する。久種湖は周囲 6km ほどの淡水湖である。2011 年に本プロジェクト一貫として実施した湖中央部のボーリング調査の結果によると、湖の形成年代は、船泊湾の砂丘列の発達と連動しており、約 4,000 年前始まり、汽水湖の時期を経て淡水湖となったことが明らかとなっている（Müller et al. 2016）。湖の前面には、船泊砂丘が東西にほぼ 1km にわたり続いている。

船泊湾中央部には、島中央部に源をもつ島最大の河川である大沢川の河口が位置する。この大沢川の河口を界に西側には浜中砂丘が形成されている。現在の船泊砂丘と浜中砂丘の内側には、複数の埋没した砂列帯の存在が確認されており、船泊湾内部の砂丘形成は、いくつかの段階を有し、砂丘形成が変化しながら、現在の地形を形成してきたことが推定できる。



第 1 図 礼文島の位置と島北部の遺跡

第3節 遺跡の立地

船泊湾沿いに広がる砂丘上から石器や土器、そして人骨が出土することは、早くから知られてきた。

これまでの調査の成果に基づくと、船泊湾の砂丘列には、縄文文化期からアイヌ文化期にわたる複数の遺物包含層が存在することが明らかとなっている。船泊湾の東側に伸びる船泊砂丘では、縄文文化期後期から、続縄文文化期、オホーツク文化期そしてアイヌ文化期に続く遺物包含層の存在が確認されている（第1図）。

この船泊砂丘上には数多くの遺跡の存在が知られている。砂丘の東端では、重兵衛沢川が船泊湾に注いでおり、河口付近の砂丘先端には擦文文化期から近世アイヌ文化期にかけての時期に形成された重兵衛沢遺跡と重兵衛沢2遺跡が位置している（松谷 1986）。

船泊湾の中央部には、大沢川の河口が位置するが、河口の西側の砂丘上には、浜中1遺跡と浜中2遺跡が広がっている。浜中1遺跡は道道507号線より北側の海側の砂丘上に位置し、貝層や墓が露出したことから遺跡の存在が周知された。この遺跡からは長年に渡り、多くの人骨資料が収集されており、遺跡の帰属時期はオホーツク文化期から近世アイヌ文化期と推定されている。

一方、浜中砂丘の南側から後背丘陵の裾野にかけては、神崎ウエンナイ遺跡が位置する。現在の神崎小学校のグラウンドや旧教員宿舍周辺から、縄文文化期から続縄文文化期の土器や石器、動物骨が多数出土している。

浜中2遺跡は、現在の浜中集落とほぼ重複する範囲と推定できる。現在、砂丘の中央部を道道が東西に貫いて走っており、集落中央の最も高い地点は標高10mを測る。砂丘の東側は緩やかに傾斜しており、砂丘の最高点と裾野の比高差は5mとなっている。浜中2遺跡は、複数の文化層が累積する多層遺跡である。1990年に実施された浜中集落の後背丘陵から船泊湾へ抜ける暗渠敷設に際して行われた事前調査では、続縄文文化期からアイヌ文化期にかけて重層する文化層が確認された（前田・山浦編 1992）。この調査以後、1990年代には筑波大学や国立歴史民俗博物館による学術調査が実施され、浜中砂丘の全域に様々な時期の貝層や住居跡、墓域などが広がることが明らかにされた（西本編 2000、前田・山浦編 2002）。

さらに2011~2015年度にかけて、千葉大学文学部考古学研究室が、浜中砂丘の最高地点周囲において学術調査を実施している（柳澤編 2016 他）。

第3章 調査区について

第1節 調査区の設定

調査区の設定は2016年度までの調査を踏襲し、中谷榮氏（当時、現在は御息女の末吉愛衣氏が管理）の所有地南西隅の基準杭から設定した4m四方のグリッド配置に基づいている。グリッド番号は南北方向をアラビア数字、東西方向はアルファベットで表記し、これらの北西交差点をもって呼称している（第2図参照）。

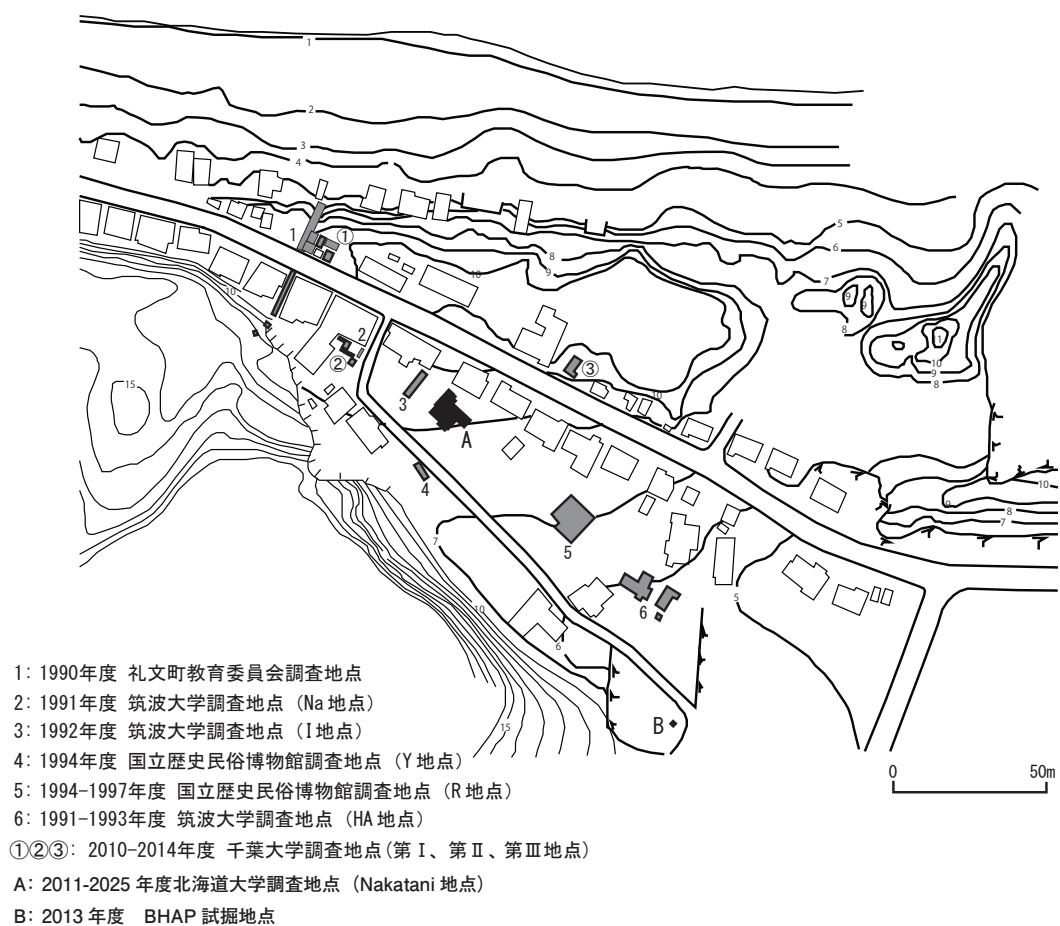
本年度の調査は大グリッドA01、A02、A03、B01、Z01、Z02、Z03を対象に実施し、最終的な面積は計40m²となっている。A02区のうち、A02-c及びA02-dにおいては、Ⅶ層の調査を行った。A02区、Z01区、Z02区では、Ⅲ層から掘り下げを開始し、Ⅳ層上面まで掘り下げを行った。A01・B01調査区では、2016年度にアワビ貝集積を確認しているが、今年度もアワビ貝層の広がりを把握するために調査区を拡張し、その全容の把握を試みた。なお、A01-a区では、十和田文化期の小児埋葬を確認している。

第2節 調査区の層序

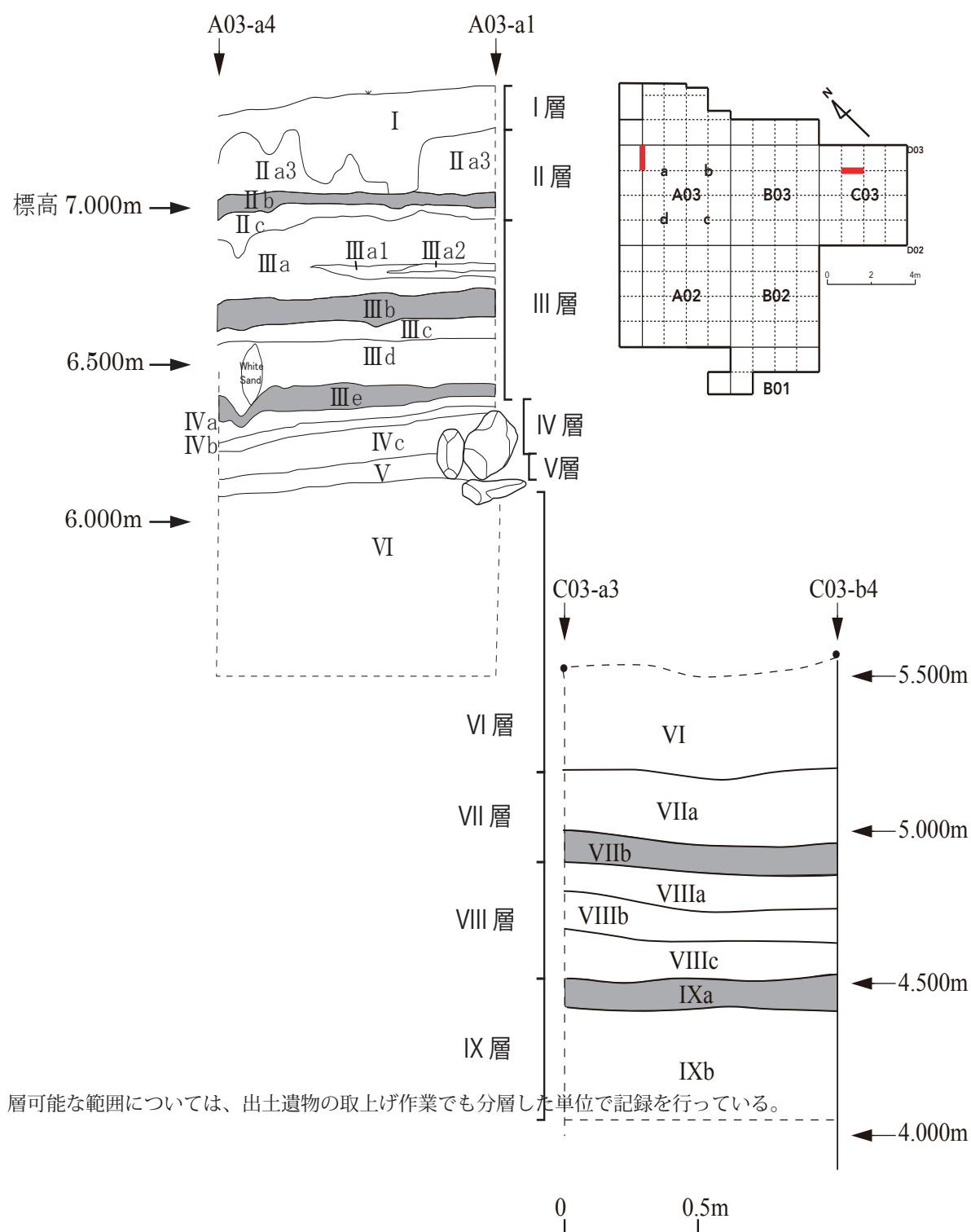
本遺跡の堆積層は、風成の自然砂層と人為的な要因で形成された魚骨層や獣骨層、生活面で構成される。これらは互層となり、全体で4mに及ぶ厚い文化層を形成している。魚骨層は、ラミナ状に広がり、発掘範囲の全域に均一な広がりを見せていない。魚骨層は部分的に重なりながら、局所的に厚く堆積する範囲も見られ、分層を困難にしている。調査区全体の基本土層は、上層から以下のような様相を呈している。

- I 層：表土層および攪乱層。下層は一部、近世末期の文化層を含む。表土には近現代の住居の基礎を含む。
- II 層：砂層。近世アイヌ文化期のアワビ貝層、擦文文化期、オホーツク文化期終末の元地式段階の遺物を含む
- III 層：魚骨層および貝層。オホーツク文化期（沈線文式、摩擦式浮文式段階、刻文式段階）の遺物を含む
- IV 層：砂層。オホーツク文化期（十和田式段階）の包含層
- V 層：砂層。オホーツク文化期（十和田式段階）～続縄文文化期の文化層
- VI 層：砂層。続縄文文化期後半段階の文化層
- VII 層：砂層。続縄文文化期前半段階の文化層で、VI層よりも遺物や遺構が増える
- VIII 層：砂層。続縄文文化期および縄文文化晩期の文化層で獣骨の密集面を含む
- IX 層：砂層。縄文文化晩期中心の文化層で獣骨の密集面を含む

I層からV層までは、文化層の形成過程にさらに細かく分層することが可能である。III層は、部分的にラミナ状に堆積している魚骨層やウニ殻層を含んでいる。調査においては、投棄単位で把握できるものも見られる。分



第 2 図 遺跡周辺地形と調査区配置図



第3図 遺跡の基本層序

第4章 検出された遺構

第1節 アイヌ文化期の遺構と出土遺物

アワビ貝集積遺構

2016年度にI層中で確認されたアワビ貝の集積遺構は、これまでの調査の過程において出土した遺物から、江戸期から明治初頭にかけてのアイヌ文化期の遺構であることが明らかになっている。

2025年度の調査では、アワビ貝層の西側と南側への広がりを確認する目的で、2024年度に引き続き、B01-a区とB01-d区を中心にアワビ貝層の広がりを確認しつつ、貝層の掘り下げを行った。

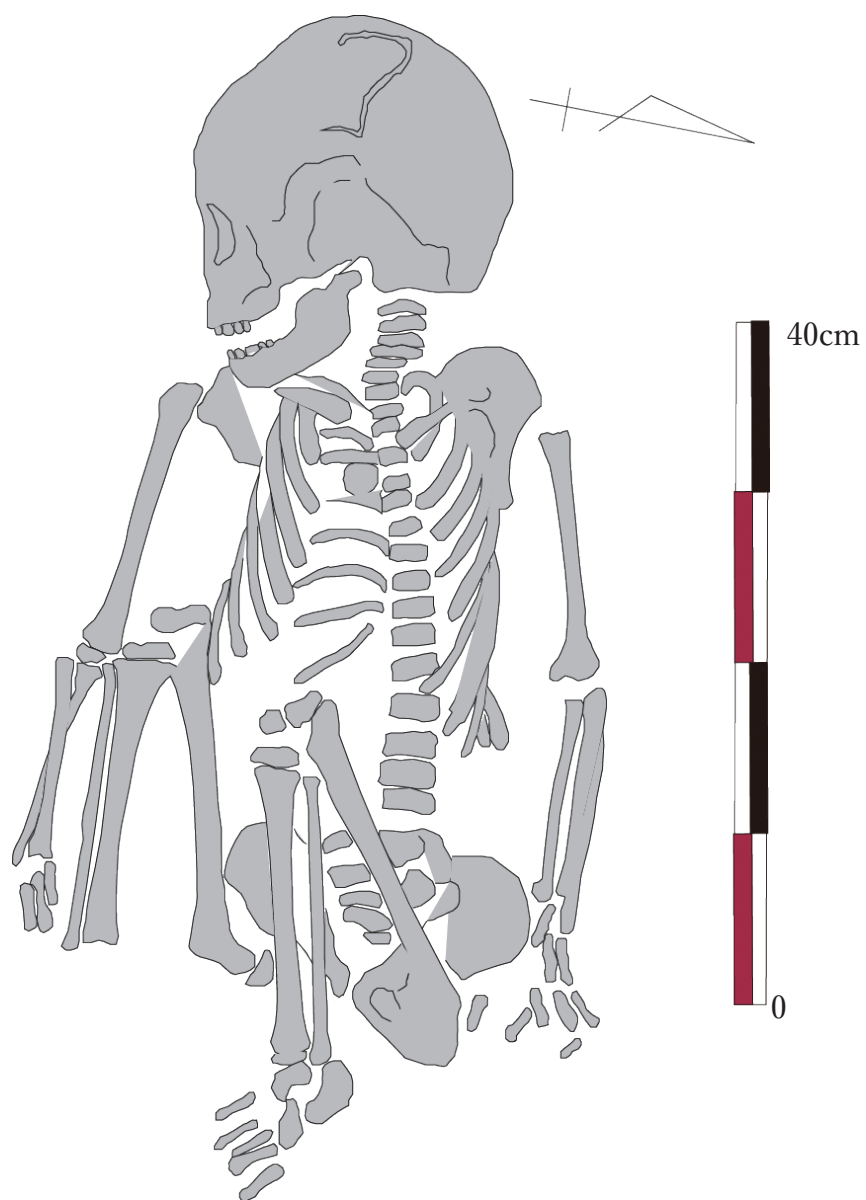
アワビ貝層の層厚は、全体として10cm程をはかり、アワビ貝の表面には、方形や円形のヤスによる刺突痕が認められる。またアワビ貝層中には、オットセイなどの海獣骨が含まれており、その多くに金属器によるカットマークを確認することができる。これまでアワビ貝層からは、マキリや古銭、鉄釘が出土しており、2023年度には、鯨骨製の先端を剣先状の研磨し、柄部に二段の切り込みを入れた骨角器が出土している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編2024、第6図参照）。2024年度の調査では、海獣の肋骨を素材としたヘラ状の骨角器が出土している。2025年度の調査でも、同様の鯨骨製のアワビおこしと考えられるヘラ状の骨角器が出土している。

これまでの調査において、アワビ貝の集積は、次のような過程を経て、形成されたことが明らかとなっている。まず最初に砂層の上面に径5-6cm程度の小礫を敷き詰めた面を形成し、その上に海獣骨や骨角器などが配置され、それを覆う形でアワビ貝が集積されている。アワビ貝の集積は幾度かに分けて、形成されており、時間的幅を持っている。またアワビ貝の集積の中には、鉄製品が含まれることがあり、その中には、人為的に変形されたり、破損した状態のものが含まれる。海獣骨には明瞭な解体痕が観察される。また金属器とは別に、古銭も出土している。

これら復元される一連の連続した行為の痕跡から、このアワビ貝を集積させた遺構は、アワビ貝の採取や、干し鮑の加工などに関連した、ある種の儀礼的な行為（送りとして知られている行為）と関連したものである可能性が高いと、考えている。2026年度もこのアワビ貝の集積の広がりの調査を継続する予定であり、アワビ貝の集積の形成過程と、儀礼行為との関係についての調査を進める予定である。

第2節 十和田式段階（オホーツク文化期前期）の小児埋葬

2025年度の調査において、A01-a区のV層中において、小児埋葬人骨を確認した。魚骨層の直下の砂層中で検出されており、周辺を確認したが、墓坑の掘り込みは確認できなかった。副葬品も伴っていない。これまでの浜中2遺跡における調査においても小児埋葬は、数例確認されているが、副葬品はほとんど見られない。とりあげの前後においては、土壌サンプルを採取し、土壌中の有機質の残留分析用のサンプルとしている。出土した遺骨については、現在、北海道大学総合博物館の久保大輔准教授の研究室で生物考古学的解析を行っている。また出土遺骨から採取したサンプルに基づいて、安定同位体分析は東京大学総合研究博物館の米田稔教授の研究室で、ゲノム解析については、琉球大学大学院医学研究科人体解剖学講座の佐藤丈寛准教授の研究室で行っている。出土遺骨の詳細は報告については、次年度の概報に行う予定である。



第4図 NAT007 出土状況

第5章 主な出土遺物

第1節 出土遺物の構成

2025年度の発掘調査においては、I層からVII層まで、各層から遺物が出土している。

層ごとの出土総数や詳細な内訳は現在確認中である。現場でトータルステーションを用いて3Dデータを記録して取り上げた出土資料は、土器片227点、石器262点、骨角器及びその未製品165点、動物遺存体214点、金属製品24点であった。記録点数は計892点であった。

第2節 土器（第5図から第9図）

土器は発掘調査区の全体において、すべての層から出土しており、縄文文化晩期、続縄文文化、オホーツク文化に加えて、少量ではあるが、元地式土器及び擦文土器が出土している。

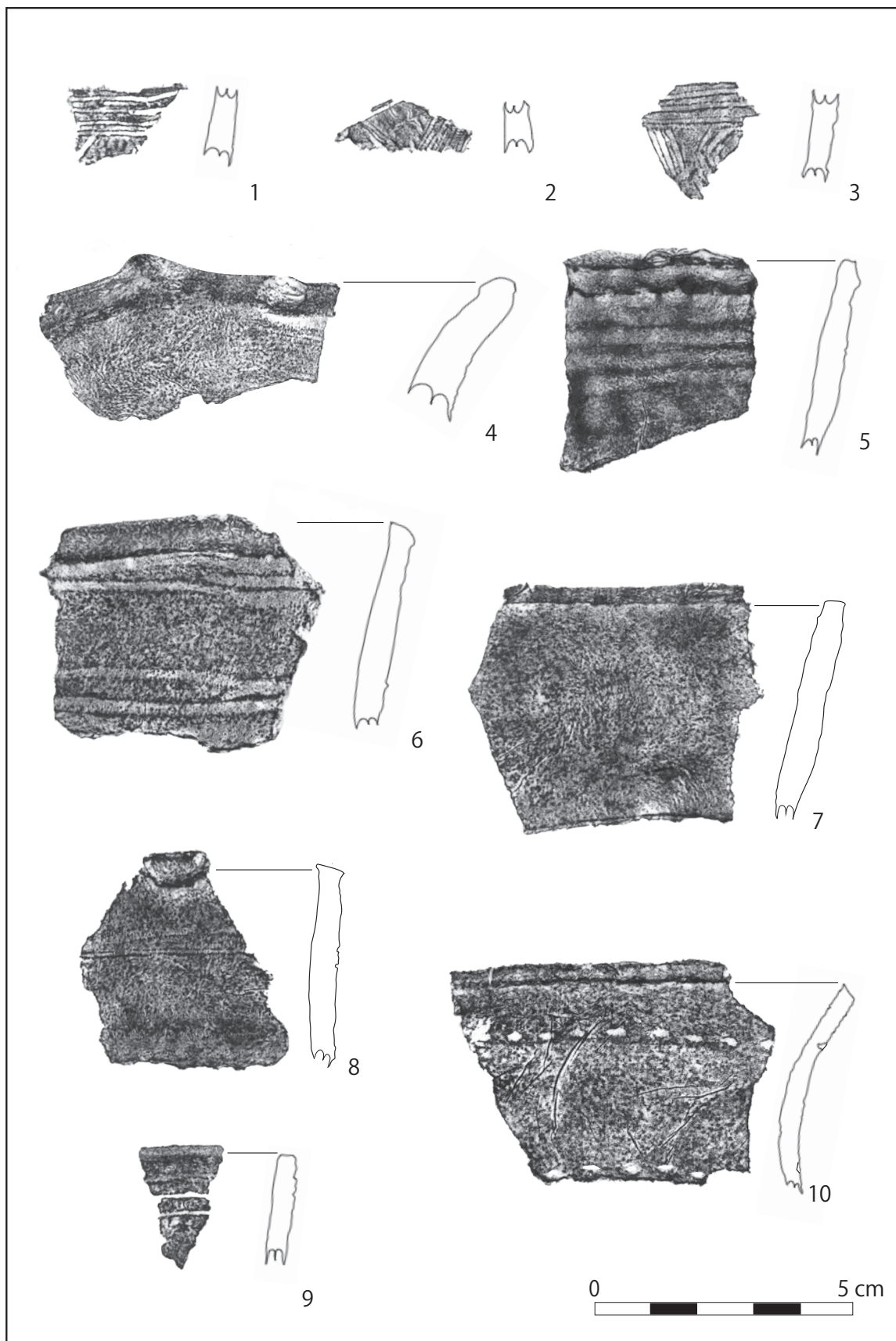
第5図の1-3は、擦文土器の頸部破片である。擦文土器の頸部破片であり、横走沈線及び鋸歯文で構成されている。4は、口唇部が肥厚して丸みを帯びている。元地式土器の口縁部であると思われる。胎土については、均一の細粒砂を含み、細い貝殻が混和されている。口縁の器面内外面で横方向にナデ調整を観察できる。5から10は、摩擦式浮文式土器の口縁部である。5と6は外側に傾斜させた口縁部を持つものである。口唇部の下縁から頸部までに数条の摩擦浮文が施されている。5の器面には、炭化物が附着している。6は、砂を多く含んだ胎土が使用され、紐積み上げ技法で成形した土器である。外面器面は赤褐色を呈し、炭化物が附着している。7から9は、平坦に整えられた口唇部をもつ、沈線文式土器の口縁部の破片である。7は、貝殻が混和されている胎土であり、口唇部の外面に炭化物の附着が見られる。器面の内外面で横方向にナデ調整をされて、頸部に手捏ねる痕跡が残されている。8と9の器面の外面には、横方向のナデ調整が確認できる。頸部に炭化物に付着がみられる。

第6図の10は、斜めに傾斜した平坦な口唇部を持つ刻文式土器の口縁部破片である。第7図の11-15は、刻文式土器の口縁破片である。あり、13は砂含有量が多めに、中細粒砂の胎土を使用され、口唇部の外縁に斜爪文、その下に斜刻文を施されている。内外面に横方向のナデ調整、内面に炭化物附着が見られる。14は砂含有量が多めに、均一の細粒砂の胎土を使用されるもの。15は口唇部に炭化物が付着している。

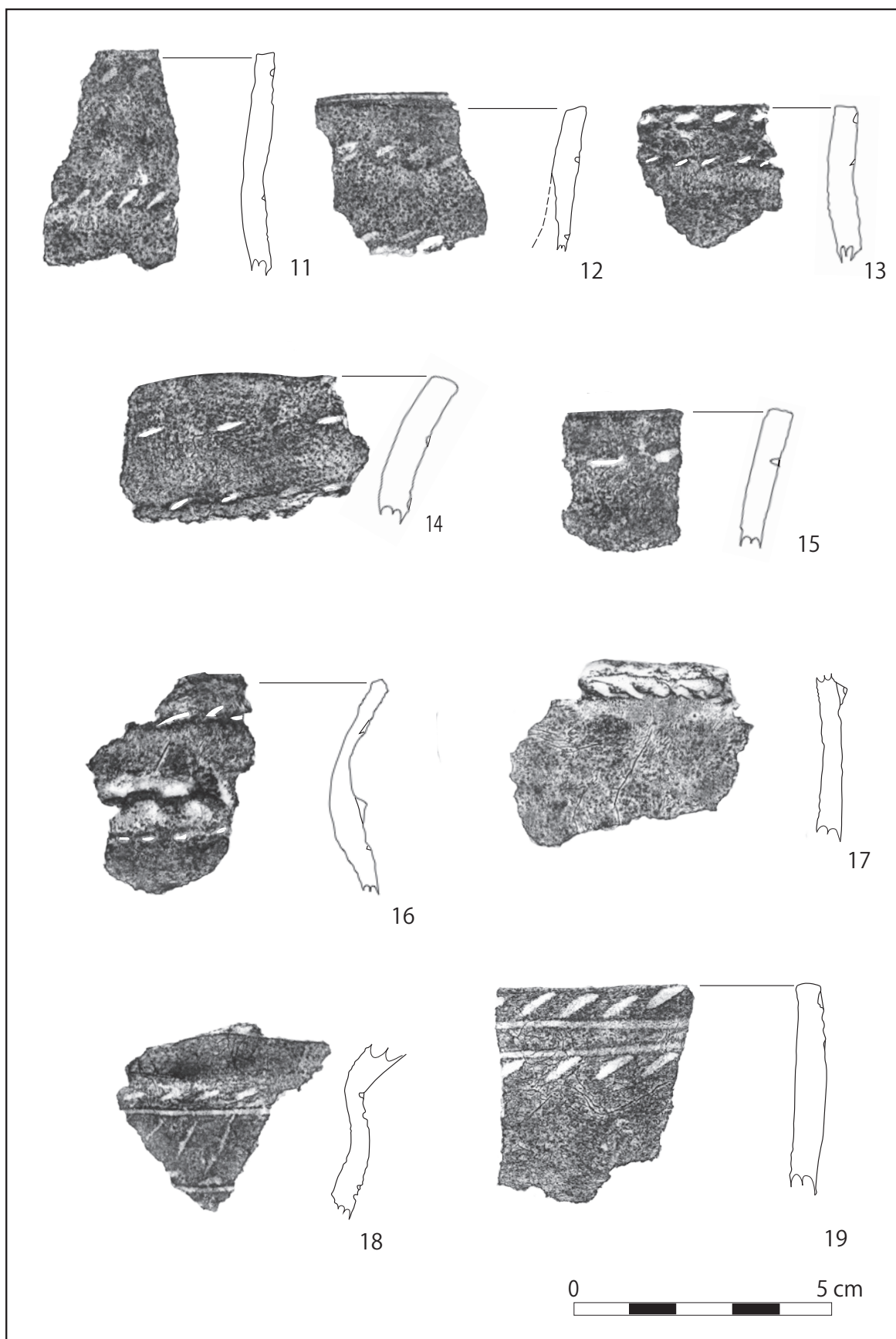
14、16、18は、口縁が大きく外反する器形の土器で、16は壺形土器の破片である。口縁部の面及び胴部に斜め刻文や横刻文、更に頸部の下縁に曲線の貼付文を施されている。土器の全面に多めな炭化物が附着している。17は、胴部で貼付文の上に斜め刻文の組合せ文様を施されている。19は、斜刻文や細沈線文が組合せ意匠をもつ刻文と沈線を組み合わせた土器の口縁である。均一な赤褐色を呈し、焼成温度がやや高い。器面内外面に横方向にナデ調整を確認できる。20はIV層から出土した刻文式時期の口縁であり、口唇部の外縁から頸部までに、斜刻文を施されており、また隆起線に刻文が刻まれている。内面で横方向にナデ調整をされている。

第8図の21は、Ⅲ層から出土した十和田式土器の口縁であり、円形刺突文が施されて、口唇部が平坦に整えられている。22-24はV層から出土した土器の底部である。22には、混和材として貝殻が混入されており、細粒砂を含む。焼成温度は低く、脆い。紐積み上げ技法で底部や胴部と接合して成形している。

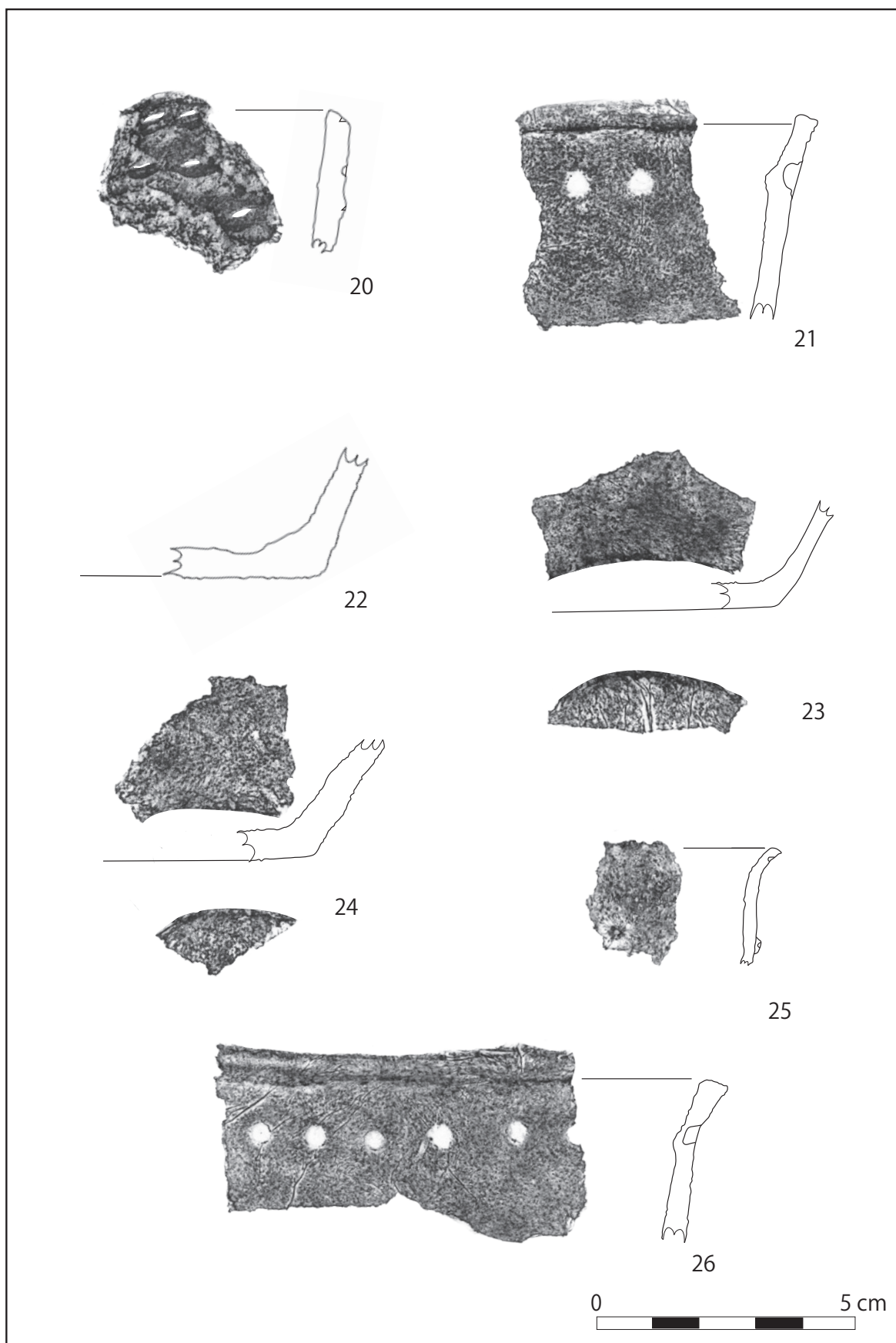
23-24は、多めな砂含有量の胎土で紐積み上げ技法を用いて作られた底部である。器面の外面が横方向や縦方向にナデ調整をされ、内面に横方向にナデ調整が確認されている。



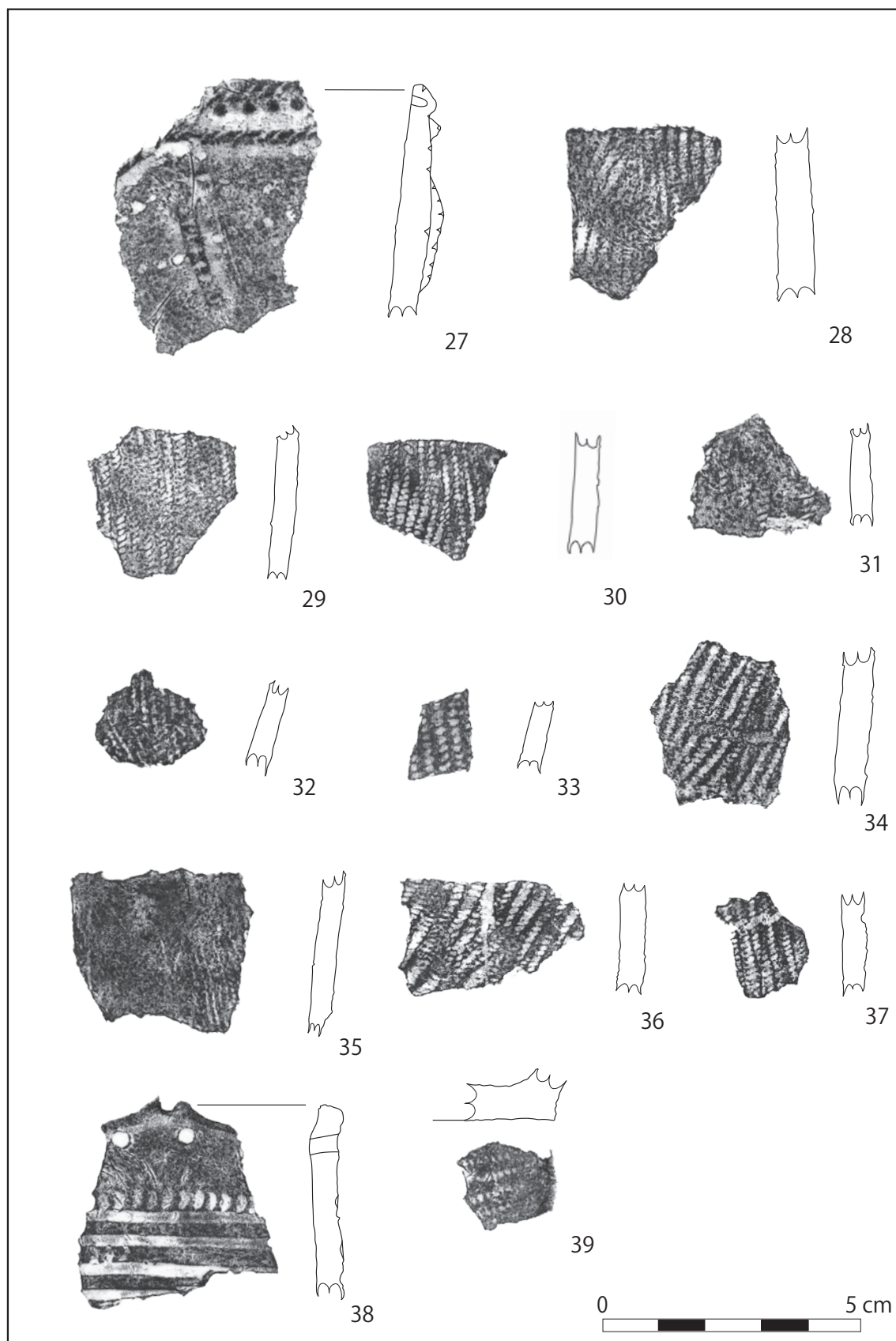
第5図 出土土器（1）



第6図 出土土器（2）



第7図 出土土器（3）



第8図 出土土器（4）



第9図 出土土器（5）

第8図に示した土器片は、Ⅶ層から出土した続縄文文化期の土器片である。27と38は口縁部破片であり、内側から外側(IO)への円形の刺突が施されている。38の口唇部は平坦に作り出されている。39は、底部破片で、底部に縄線文を確認できる。この他に破片が接合する状況から3個体の底部を確認できる。Ⅶ層からの土器は、いずれも細かな破片の状態で出土しており、完形に復元可能な土器個体は確認できていない。

第9図の40から42は、Ⅴ層で確認された十和田式土器段階の遺構内に集中して倒立した状態で確認された土器である。遺構の性格は、調査面積が狭くその全容の確認は、2026年度の調査を待たねばならないが、住居的な遺構である可能性がある。43は、Ⅷ層で確認された縄文文化晩期の完形の小型土器である。周辺では石器類と炉跡が確認されている。

第3節 石器(第10図、第11図)

縄文晩期、続縄文、オホーツク文化の各層からは、多様な形態と石材からなる石器製品が出土した。

第10図に示される両面調整石器には、石鏃、両面尖頭器、両面石器が含まれる。石鏃の石材は黒曜石および細粒のチャートである。石鏃の形状は、有茎のものが多く確認されるが、茎部の挟りが深いもの(第10図:1)、挟りが浅く菱形を呈するもの(第10図:2-3)、および明確な頸部のない木葉形(第10図:4)で構成され、両面尖頭器の形状も、同様の形態パターンに従っている(第10図:5-7)。Ⅵ層、Ⅶ層、およびⅧ層出土の両面石器の形状は、対称的な楕円形である(第10図:8, 9, 11)。これらの両面石器は入念に調整されており、薄い器体を持つ。多数の両面加工石器は破片状態で出土している。Ⅴ層出土の両面加工石器は、異なる形態を示す(第10図:10)。本製品は珪質頁岩の礫を素材としており、断面が厚い。この石器は両面加工石器の未成品と見なすことができる。

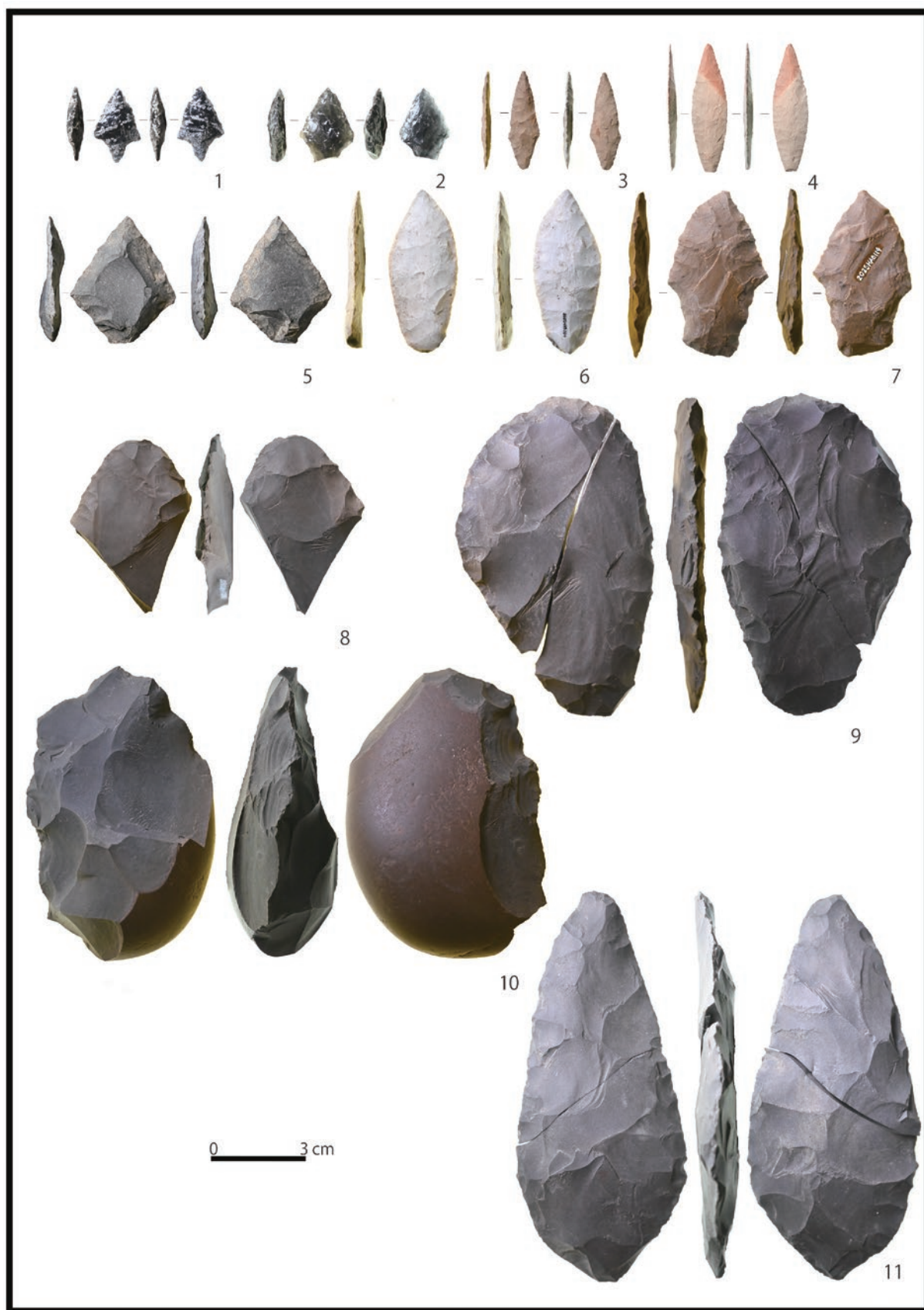
両面石器に加えて、石核、片面調整石器、磨製石器も石器群のコレクションに含まれている(第11図)。石核の典型的な例を第11図:3に示す。この石核は求心的剥離タイプであり、細粒のチャートを素材としている。片面調整石器は、調整痕のある剥片、円形搔器、端刃搔器によって代表される(第11図:1,2,4)。なお、Ⅳ層出土の端刃搔器は、本時期の典型的な事例ではない。

Ⅴ層出土資料には、磨製石斧の破片が含まれている(第11図:6)。この石斧破片は長方形の平面形状を呈し、断面は楔状である。石斧は中間部で折損している。刃部も広範囲にわたって損傷を受けている。

Ic層出土の網錘(第11図:5)の中心部にある孔は、一見して火山岩に自然に穿たれたものであるように見える。しかしながら、この孔の周縁部には剥離痕が認められ、本製品が人為的に製作されたことを示している。

第4節 骨角器(第12図)

出土骨角器は、サイズや形態が多様であり、形態的特徴から骨針、結合式釣針、鉋、根付、鮑おこしが含まれると考えられる。第12図-1(Ⅶ層)は鳥菅骨を加工した骨鏃または骨針の先端部破片である。器体全面が入念に研磨されており、特に先端は両側縁が末端で収斂するように作り出されている。基部は折損している。断面は扁平な台形を呈し、背面には骨の自然な構造による溝が認められる。第12図-2(Ⅶ層)は、先端部に逆鉤を持つ骨角器である。索孔・索溝・索肩および基部の着柄用の面取り加工が見られないことから、鉋先やヤスではないと考えられる。逆鉤部分は切削によって一次整形が施され、その後に全体的に研磨されている。これらの特徴から結合式釣針の先端部の可能性がある。第12図-5(Ⅷ層)は、円筒状の胴部を持ち、上部に逆鉤が確認できる遺物である。基部と先端は大きく破損



第 10 図：1-4：石鏃、5-7：両面尖頭器、8-11：両面石器。



第 11 図：1. 調整痕のある剥片、2. 円形搔器、3. 石核、4. 端刃搔器、5. 網錘、6. 磨製石斧の破片



第 12 図：1. 刺突具ないし鏃；2. 鉤状製品 3. 根付；4. - 6. 鋇；7. 鯨骨製ヘラ

している。一方で、上端部の両側は意図的な面取りが欠損した先端部に収斂していく向きで左右対称に行われていることから、先端部は鋭角または突出した形態を持っていたことが推測される。器種の同定は困難である。一方で、遠端部の両側は意図的な面取りが左右対称に行われていることから、先端部の鋭角化または、別の銚頭を着柄するための中柄として機能した道具であったことが推察される。第12図-6（IIa層）は、先端部に端刃を装着する溝をもつ銚（第2種銚頭）の破損品である。先端の溝幅が非常に狭いことから、金属製の銚先鏃が使用されていた可能性がある。長軸方向に半割されたような状態にあるものの、索孔は明確に認められ、紐状の道具を使用し本銚は開窩式銚に分類することができる。

基部の折損部直上には若干の面取り加工の痕跡があり、着柄のための平坦面を作り出していたとも考えられる。以上の特徴から本資料はヤス先の破損品に分類した。

第6章 まとめ

2024年度の調査は、I層の近世江戸期に比定されるアイヌ文化のアワビ貝の集積遺構の広がり、III層からV層にかけてのオホーツク文化期の包含層の調査、さらにVI層からVII層で確認されている続縄文文化期の生活面の調査を中心に行った。

アワビ貝の集積遺構は、近世江戸期に形成されたものを主体とするが、上層からは明治期の貨幣が出土するなど、連続して長期間にわたり形成されたものであることが明らかになった。平面的な広がり、さらに南側と西側へ伸びる可能性がある。また2023年度に確認された小礫の集中を踏まえると、アワビ貝の形成過程には、一定の規則性（法則性）を持つ可能性も想定される。アワビ貝層から出土する資料は、調査年度を重ねるごとに多様性を示しており、アイヌ文化期の様々な用具がアワビ貝とともに埋納されている状況が見て取れる。

オホーツク文化期の包含層については、2025年度の調査範囲では、ほぼ魚骨層は確認されていない。黒色砂の包含層は細かく細分することはできず、III層中より摩擦式浮文式土器、沈線文式土器、刻文式土器の時期の異なる複数の土器片が混在して出土している。明確な遺構は確認できていない。一方で2025年度の調査では住居様の遺構と思われる面が確認されており、詳細については、2026年度の調査で確認する予定である。

V層はオホーツク文化期初頭の十和田式土器段階の遺物が出土する包含層である。V層中ではこれまでも集石土坑が確認されており、III層中のオホーツク文化期の生活面とは異なる活動が行われていた可能性が高い。またIII層に比べて石器類の出土量が多いこともV層の特徴である。

VI層からVII層は続縄文文化期の生活面が確認されている。2024年度の調査でも海獣骨や土器、石器が密集する生活面の広がり確認されている。調査面積が少なく、その全容はいまだに不明である。炉など遺構も確認できていない。出土する遺物の内容は多彩であり、2024年度の調査では石器や土器に加えて貝製平玉も出土している。土器については、細片が多く器形を復元できるまとまった個体を確認できていない。復元できた底部破片から推定して、少なく見積もって3個体分の土器があると推定される。細かな破片の接合作業を継続中であり、土器型式の特定も含めて、分析を続ける予定である。

2025年度の調査では、遺跡最下部の文化層である縄文文化晩期の文化層を部分的に調査している。この文化層の調査については、2026年度以降の調査でその広がりや内容の把握を行いたい。

引用・参考文献

- 岩波連、長沼正樹 2015「浜中 2 遺跡の遺跡形成過程とその特異性」『一般社団法人日本考古学協会第 81 回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、東京、154-155 頁
- 岩波連、平澤悠、岡田真弓、種石悠、長沼正樹、藤澤隆史、蔦谷匠、佐藤丈寛、深瀬均、木村亮介、米田穰、安達登、佐藤孝雄、石田肇、加藤博文 2016「礼文町浜中 2 遺跡における考古学調査 (2011-2016 年度)」北海道考古学会 (編)『2016 年度北海道考古学会遺跡調査報告会資料集』、北海道考古学会、登別、83-92 頁
- 加藤博文 2015「礼文島における海洋適応史の復元 - 国際共同研究を通じた取り組み -」岸上伸啓 (編)『国立民族学博物館調査報告 132 環北太平洋地域の先住民文化』、国立民族学博物館、大阪、125-143 頁
- 加藤博文、岩波連、平澤悠、鈴木建治 2012『2011 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡考古学調査概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/52658>
- 西本豊弘編 2000『浜中 2 遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告 85 集
- 東通村史編集委員会編 1999『東通村史 遺跡発掘調査報告書編』東通村
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2014『2013 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/56663>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2015『2014 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/58760>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2016『2015 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2017『2016 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/65258>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2018『2017 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2019『2018 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/76489>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2024『2023 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/92152>
- 前田潮・山浦清編 1992『北海道礼文町 浜中 2 遺跡の発掘調査』北海道礼文町教育委員会
- 前田潮・山浦清編 2002「礼文島浜中 2 遺跡第 2 ～ 4 次発掘調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』13、35-87 頁
- 松谷純一編 1986『重兵衛沢 2 遺跡』北海道礼文町教育委員会
- 三宅俊彦 2020「海外で出土した寛永通宝」『月刊 考古学ジャーナル 4』No. 738, 9 - 13 頁
- 柳澤清一編 2016『北海道礼文町浜中 2 遺跡 第 5 次発掘調査概報』、礼文・利尻島移籍調査の会
- Müller S., Schmidt M., Kossler A., Leipe C., Irino T., Yamamoto M., Yonenobu H., Gosler T., Kato H., Wagner M., Waber A., and Tarasov P., 2016, Paleobotanical records from Rebun Island and their potential for improving the chronological control and understanding human-environment interactions in the Hokkaido Region, Japan. *The Holocene*, 1-15, pp. 1646-1660, <https://doi.org/10.1177/0959683616641738>
- Weber, A. W., Jordan, P., & Kato, H. 2013, Environmental change and cultural dynamics of Holocene hunter-gatherers in Northeast Asia: Comparative analyses and research potentials in Cis-Baikal (Siberia, Russia) and Hokkaido (Japan). *Quaternary International*, 290, pp. 3-20.

報告書抄録

ふりがな	にせんにじゅうごねんど ほっかいどうれぶんちょう はまなかにいせき はつくつがいようほうこくしょ						
書名	2025 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書						
副書名	2025 Preliminary Archaeological Field report of Excavation at Hamanaka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究室（加藤 博文、平澤悠）						
編集機関	北海道大学アイヌ・先住民研究センター						
所在地	札幌市北区北 8 条西 6 丁目						
発行年月日	2026（令和 8）年 6 月 5 日 作成						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
はまなかにいせき 浜中 2 遺跡	ほっかいどうれぶんぐんれぶんちょう おおあさふなどまりむら あさほろないほ 北海道 礼文郡 礼文町 大字船泊村 字ホロナイホ	01517	H-08-19	45° 43′ 26″	141° 00′ 96″	20250801 ～ 20250827	42 m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
浜中 2 遺跡	遺物 包含地	アイヌ文化期 （近世） 擦文文化期 オホーツク文化期 続縄文文化期 縄文文化期	アワビ殻を 特徴とする 混土貝層 石囲炉・ 集石土壌 動物骨集中	方形の孔を有する アワビ貝殻 土器片（擦文土器、オホ （ーツク土器）、石器、 骨角器（骨鏃、釣針など） 土器片、石器 （両面調整石器など） 骨角器類 （ヤス先、彫像など） 動物遺存体 （海獣類、鳥類など）		I 層中検出したアワ ビ貝殻を特徴とする混 土貝層は送り場と考え られる。 V 層中で十和田文化期 の小児埋葬を確認	
要 約	B01 調査区で I 層中で近世アイヌ文化期の送り場遺骨と考えられるアワビ貝殻の集中を確認した。 B02 調査区でオホーツク文化期十和田式段階の文化層を確認した。A01-a 区で十和田式段階の 小児埋葬を確認した。 南東方向に向けては魚骨層の広がりが認められない。 A03 区調査区と B03 調査区で IX 層において縄文文化層が確認され、動物骨と石器が密集する状況が 明らかとなっている。						

2025 年度

北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書

2026 年 6 月 5 日 作成

編集 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究室

060-0808 札幌市北区北 8 条西 6 丁目

